雪女

小泉八雲

登場人物

ナレーター

巳之吉

雪女

お雪

一場

◆武蔵の国。木こりの茂作と巳之吉が、仕事に出かける。

◆ナレーター

武蔵の国のある村に茂作、巳之吉と云う二人の木こりがいた。この話のあった時分には、茂作は老人であった。そして、彼の年季奉公人であった巳之吉は、十八の少年であった。毎日、彼等は村から約二里離れた森へ一緒に出かけた。その森へ行く道に、越さねばならない大きな河がある。そして、渡し船がある。渡しのある処にたびたび、橋が架けられたが、その橋は洪水のあるたびごとに流された。河の溢れる時には、普通の橋では、その急流を防ぐ事はできない。

二場

◆冬。茂作と巳之吉が吹雪に遭い、渡し守の小屋に泊まる。
◆ナレーター、雪女

茂作と巳之吉はある大層寒い晩、帰り途で大吹雪に遇った。渡し場に着いた、渡し守は船を河の向う側に残したままで、帰った事が分った。泳がれるような日ではなかった。それで木こりは渡し守の小屋に避難した――避難処の見つかった事を僥倖に思いながら。小屋には火鉢はなかった。火をたくべき場処もなかった。窓のない一方口の、二畳敷の小屋であった。茂作と巳之吉は戸をしめて、蓑をきて、休息するために横になった。初めのうちは　さほど寒いとも感じなかった。そして、嵐はじきに止むと思った。

老人はじきに眠りについた。しかし、少年巳之吉は長い間、目をさましていて、恐ろしい風や戸にあたる雪のたえない音を聴いていた。河はゴウゴウと鳴っていた。小屋は海上の和船のようにゆれて、ミシミシ音がした。恐ろしい大吹雪であった。空気は一刻一刻、寒くなって来た、そして、巳之吉は蓑の下でふるえていた。しかし、とうとう寒さにも拘らず、彼もまた寝込んだ。

彼は顔に夕立のように雪がかかるので眼がさめた。小屋の戸は無理押しに開かれていた。そして雪明かりで、部屋のうちに女、――全く白装束の女、――を見た。その女は茂作の上に屈んで、彼に彼女の息をふきかけていた、――そして彼女の息は　あかるい白い煙のようであった。ほとんど同時に巳之吉の方へ振り向いて、

彼の上に屈んだ。彼は叫ぼうとしたが何の音も発する事ができなかった。白衣の女は、彼の上に段々低く屈んで、しまいに彼女の顔はほとんど彼にふれるようになった、そして彼は――彼女の眼は恐ろしかったが――彼女が大層綺麗である事を見た。しばらく彼女は彼を見続けていた、――それから彼女は微笑した、そしてささやいた、――

雪女　『私は今ひとりの人のように、あなたをしようかと思った。しかし、あなたを気の毒だと思わずにはいられない、――あなたは若いのだから。……あなたは美少年ね、巳之吉さん、もう私はあなたを害しはしません。しかし、もしあなたが今夜見た事を誰かに――あなたの母さんにでも――云ったら、私に分ります、そして私、あなたを殺します。……覚えていらっしゃい、私の云う事を』

そう云って、向き直って、彼女は戸口から出て行った。その時、彼は自分の動ける事を知って、飛び起きて、外を見た。しかし、女はどこにも見えなかった。そして、雪は小屋の中へ烈しく吹きつけていた。巳之吉は戸をしめて、それに木の棒をいくつか立てかけてそれを支えた。彼は風が戸を吹きとばしたのかと思ってみた、――彼はただ夢を見ていたかもしれないと思った。それで入口の雪あかりの閃きを、白い女の形と思い違いしたのかもしれないと思った。しかもそれもたしかではなかった。彼は茂作を呼んでみた。そして、老人が返事をしなかったので驚いた。彼は暗がりへ手をやって　茂作の顔にさわってみた。そして、それが氷である事が分った。茂作は固くなって死んでいた。……

三場

◆翌朝。巳之吉は助け出され、その後も木こりを続ける。

◆ナレーター

あけ方になって吹雪は止んだ。そして日の出の後少ししてから、渡し守がその小屋に戻って来た時、茂作の凍えた死体の側に、巳之吉が知覚を失って倒れているのを発見した。巳之吉は直ちに介抱された、そして、すぐに正気に帰った、しかし、彼はその恐ろしい夜の寒さの結果、長い間病んでいた。彼はまた老人の死によってひどく驚かされた。しかし、彼は白衣の女の現れた事については何も云わなかった。再び、達者になるとすぐに、彼の職業に帰った、――毎朝、独りで森へ行き、夕方、木の束をもって帰った。彼の母は彼を助けてそれを売った。

四場

◆翌年の冬。巳之吉がお雪と出会う。

◆ナレーター

翌年の冬のある晩、家に帰る途中、偶然同じ途を旅している一人の若い女に追いついた。彼女は背の高い、ほっそりした少女で、大層綺麗であった。そして巳之吉の挨拶に答えた彼女の声は歌う鳥の声のように、彼の耳に愉快であった。それから、彼は彼女と並んで歩いた、そして話をし出した。少女は名は「お雪」であると云った。それからこの頃両親共なくなった事、それから江戸へ行くつもりである事、そこに何軒か貧しい親類のある事、その人達は女中としての地位を見つけてくれるだろうと云う事など。巳之吉はすぐにこの知らない少女になつかしさを感じて来た、そして見れば見るほど彼女が一層綺麗に見えた。彼は彼女に約束の夫があるかと聞いた、彼女は笑いながら何の約束もないと答えた。それから、今度は、彼女の方で巳之吉は結婚しているか、あるいは約束があるかと尋ねた、彼は彼女に、養うべき母が一人あるが、お嫁の問題は、まだ自分が若いから、考えに上った事はないと答えた。……こんな打明け話のあとで、彼等は長い間ものを云わないで歩いた、しかし諺にある通り『気があれば眼も口ほどにものを云い』であった。村に着く頃までに、彼等はお互に大層気に入っていた。そして、その時巳之吉はしばらく自分の家で休むようにとお雪に云った。彼女はしばらく はにかんで ためらっていたが、彼と共にそこへ行った。そして

彼の母は彼女を歓迎して、彼女のために暖かい食事を用意した。お雪の立居振舞は、そんなによかったので、巳之吉の母は急に好きになって、彼女に江戸への旅を延ばすように勧めた。そして自然の成行きとして、お雪は江戸へは遂に行かなかった。彼女は「お嫁」としてその家にとどまった。

五場

◆五年後のある晩。巳之吉がお雪に吹雪の日の話をする。
◆ナレーター、巳之吉、お雪

お雪は大層よい嫁である事が分った。巳之吉の母が死ぬようになった時——五年ばかりの後——彼女の最後の言葉は、彼女の嫁に対する愛情と賞賛の言葉であった、——そしてお雪は巳之吉に男女十人の子供を生んだ、——皆綺麗な子供で色が非常に白かった。

田舎の人々はお雪を、生れつき自分等と違った不思議な人と考えた。大概の農夫の女は早く年を取る、しかしお雪は十人の子供の母となったあとでも、始めて村へ来た日と同じように若くて、みずみずしく見えた。

ある晩子供等が寝たあとで、お雪は行燈の光で針仕事をしていた。そして巳之吉は彼女を見つめながら云った、——

巳之吉　『お前がそうして顔にあかりを受けて、針仕事をしているのを見ると、わしが十八の少年の時遇った不思議な事が思い出される。わしはその時、今のお前のように綺麗なそして色白な人を見た。全く、その女はお前にそっくりだったよ』……

仕事から眼を上げないで、お雪は答えた、——

お雪　『その人の話をしてちょうだい。……どこでおあいになったの』

そこで巳之吉は渡し守の小屋で過ごした恐ろしい夜の事を彼女に話した、——そして、にこにこしてささやきながら、自分の上に屈んだ白い女の事、——それから、茂作老人の物も云わずに死んだ事。そして彼は云った、——

巳之吉　『眠っている時にでも起きている時にでも、お前のように綺麗な人を見たのはその時だけだ。もちろんそれは人間じゃなかった。そしてわしはその女が恐ろしかった、――大変恐ろしかった、――がその女は大変白かった。……実際わしが見たのは夢であったかそれとも雪女であったか、分らないでいる』……

お雪は縫物を投げ捨てて立ち上って巳之吉の坐っている処で、彼の上に屈んで、彼の顔に向って叫んだ、――

お雪　『それは私、私、私でした。……それは雪でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも云ったら、私はあなたを殺すと云いました。……そこに眠っている子供等がいなかったら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事に大事になさる方がいい、もし子供等があなたに不平を云うべき理由でもあったら、私はそれ相当にあなたを扱うつもりだから』……

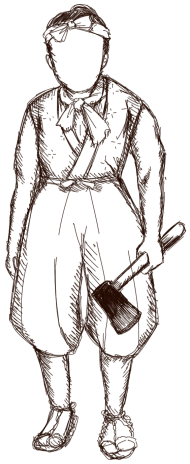
彼女が叫んでいる最中、彼女の声は細くなって行った、風の叫びのように、――それから彼女は輝いた白い霞となって屋根の棟木の方へ上って、それから煙出しの穴を通ってふるえながら出て行った。……もう再び彼女は見られなかった。

〈完〉

1 場

武蔵の国：明治になって都道府県が置かれる前の国名です。東京都・埼玉県から、神奈川県の一部が含まれます。今でも、武蔵野市、武蔵村山市、武蔵小杉など、「武蔵」がつく地名が多く残っています。人口の多い地域でしたが、この作品では木こりがいたり、雪が深かったりすることから、山がちな東京都の西側や埼玉県のあたりであると推測されます。

木こり：「樵」とも書きます。材木などに使うための木を切る仕事をしている人のことです。伐採する木を見定めたり、安全に木を切り倒したりするためには、専門の知識や技術が必要です。



▲木こり

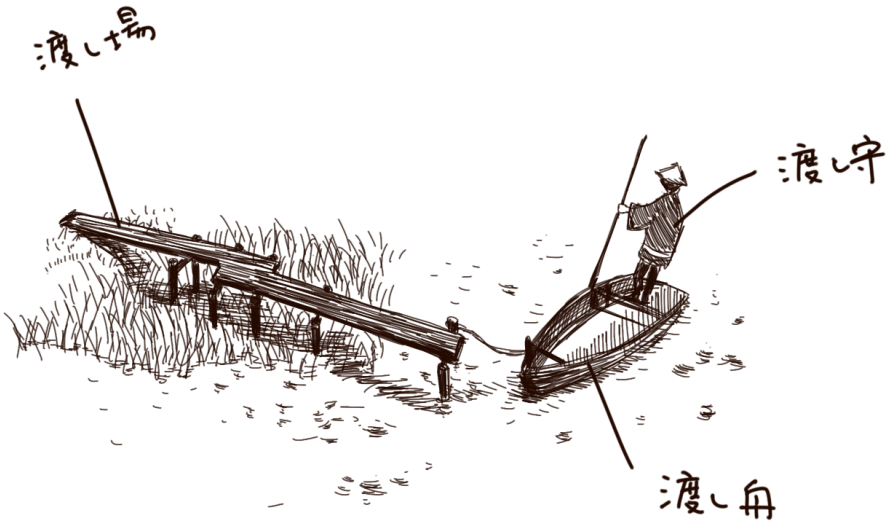
時分：おおよその時期や時刻、またはちょうどよい時期のことです。

年季奉公：期間を決めて主人に仕える働き方です。修行の意味合いもあり、年季が明ける（決めた期間が終わる）と、働き先を変えたり、独立したりすることができました。多くは住み込みで、日用品は支給されますが、給料は、支払われないか、僅かな額だったようです。

二里：「里」は、昔の距離の単位です。1 里＝4km ですので、2 里は 8km。比較的近くの森であるようです。

渡し船：港や川、湖などにで、両岸を往復して荷物や人を運ぶ舟のことです。橋を架けるのが難しい場所では一般的な交通手段でした。渡し場には渡し守が常駐していて、渡し守に運賃を払い、乗せてもらいました。

▼渡し船、渡し場、渡し守



2 場

大層：「大変」「ひどく」という意味で、程度が著しい様です。

渡し場：渡し船が泊まる場所です。簡単なお茶屋さんが併設されていることもありました。

渡し守：渡し船の船頭のことです。渡し船は小さな船なので、船頭が一人で船を漕ぎました。

僥倖：予想外の幸運、ラッキーなことです。

火鉢：中に灰を入れ、炭火で暖を取る暖房器具です。お湯を沸かすなど、簡単な調理もできます。陶や木、金属などで作られています。

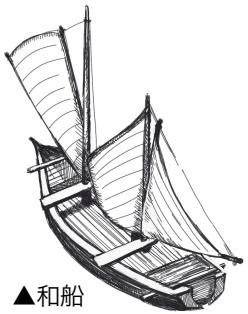
火鉢▶

一方口：一つの方にだけある出入口のことです。出入口が１つしかないということは、一間しかないということです。

蓑：わらを編んで作ったレインコートです。水をはじき、風も通すので、着心地は意外と良かったようです。ただ、かさばるのと、燃えやすいのが難点でした。

▲蓑

和船：日本で発達した船のことです。木製で、甲板がなくお椀型をしているのが特徴です。櫓（オール）で漕いだり、帆で風を受けたりして進みます。水が溜まりやすく外洋に出るには適さないため、幕末以降は洋船に取って代わられました。


▲和船

一刻一刻：「刻」は、陰暦でもちいられた時間の単位です。季節によって変わりますが、二時間前後です。「一刻一刻」は、通常「刻一刻」といい、時間が経つにつれて、という意味です。

無理押し：強引に物事を押し進めることです。

雪明かり：積もった雪に月光、灯火などが反射し、夜でも周囲が明るく見えることを言います。

白装束：真っ白な着物のことです。死んだ人に着せるほか、結婚式の際に女性が着ます。「全く白装束」なので、着物も帯も、着ているものすべてが白かったようです。

害(す)：傷つけたり、殺したりすることです。

3場

達者：ここでは、病気や怪我がなく、元気なことです。

4場

女中：江戸時代、裕福な武家や農家で雇われていた使用人のことです。多くは住み込みでした。

約束の夫：結婚の約束をしている男性、つまりいいなづけや婚約者のことです。

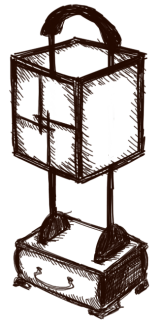
眼も口ほどに物を言い：現代では「目は口ほどにものを言う」と表現することわざです。言葉に出さなくても、表情を見れば思っていることがわかる、裏を返せば、言葉でごまかそうとしても、目の表情から本心が読み取られてしまう、という意味です。小泉八雲の原文ではローマ字で「*Kiga areba, memo kuchi hodo ni mono wo iu*」と書かれ、その直後に英語で意味が説明されています。

立居振舞：立ったり座ったりするときの動作、広くは生活するときのさまざまな所作です。その人の上品さや卑しさがあらわれます。

そんなによかったので：少し変った表現ですが、原文（英語）では「*O-Yuki behaved so nicely that Minokichi's mother took a sudden fancy to her*」という文で、直訳すると、「巳之吉の母がすぐに彼女を好きになってしまうほど、お雪はよく振る舞い、」となります。訳者は、「so」を「そんなに」と訳したと考えられます。

5場

行燈：「行灯」とも書きます。日本の伝統的な照明具です。円形、または四角の木や竹の枠に和紙を張り、中に油皿を置いて、火をともしま


▲行灯

す。床の上に直接置く物、天井から吊す物、足が付いている物、店先の路上に出す物など、様々な形があります。

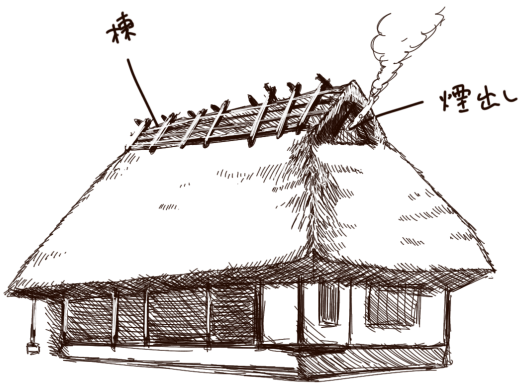
針仕事：裁縫、縫い物のことです。

わし：現代では方言以外ではおじいさんが使うイメージがありますが、江戸時代には年齢に関係なく、様々な身分の人が使っていました。

棟木：家の、棟、屋根の一番高い部分に取り付けられる木材のことです。傾斜した屋根の面と面が交わる部分を棟と呼びます。棟木を取り付ける「棟上げ」が終了すると、家の骨組みが完成したことになるので、建築工程の１つの節目として「上棟式」などをして祝う習慣があります。「むなぎ」「むねぎ」「むねき」などと呼びます。

煙出し：日本家屋において、屋根に付けられた簡易な窓のことです。囲炉裏や台所の煙や煤が天井に上って行った後、屋外に出ていくための換気口です。農家の茅葺き屋根は、屋内で焚く火の煙や煤によって丈夫になり、虫除けや痛み防止になったようです。

▼棟木、煙出し



Podcast ののラジオ
好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com/wp/archives/podcast
ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののと読む名作文学　小泉八雲　「雪女 YUKI-ONNA」 Podcast 版

発行日 2018 年 7 月 1 日
著　者 小泉　八雲
翻　訳 田部　隆次
編　集 劇団のの
発　行 劇団のの
http://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
底 本　『小泉八雲全集第八巻　家庭版』
出版社 第一書房
初　版 昭和 12（1937）年 1 月 15 日
図書カード URL
https://www.aozora.gr.jp/cards/000258/card50326.html